

日本サンゴ礁学会賞を受賞して

大森 信
阿嘉島臨海研究所所長

My coral reef research and prospects: Commemoration in winning the society award from the Japanese Coral Reef Society

M. Omori
E-mail: makomori@amsl.or.jp

思いがけなく学会賞を受賞することになり、光栄に思っています。誠にありがとうございました。賞の対象は「サンゴの生態と種苗生産技術の研究における長年の貢献」ですが、私がサンゴの研究を始めたのは阿嘉島臨海研究所ができてからなので、この賞はそこで一緒に研究活動に携わってこられた方々とともに、そしてその代表として私がいただいたようなものです。私がどのようにサンゴとさんご礁に魅せられ、研究を進めてきたのかを述べて、それらの方々への感謝としたいと思います。

北大水産学部の浮遊生物学教室(元田研究室)に入ってプランクトンの繊細で巧妙な姿に感じ入っていた1959年の冬のある日、私は元田 茂先生からパラオのさんご礁の話初めて耳にした。先生が若き日を過ごされたパラオ熱帯生物研究所では、雨水をタンクに溜めて飲み水にしたり、化学分析のためのガラス器具をスコールの水で濯いだりしたご苦労があったが、現地のチャモロの人たちとの楽しい交流やヨットでの島めぐりは、先生の熱帯での暑くて単調な生活の息抜きになったらしい。そんな話を先生は、とても懐かしそうな眼で話された。教室の窓からは外の、吹雪に消されそうな町並みが霞んで見えるだけだったが、私はヤシの葉が潮風にそよぎ、陽光の輝く南の海とさんご礁、そしてパラオの人たちを想像して夢を膨らませた。いつか南洋に行ってさんご礁を見たい。それは私の願望になったが、その頃、日本人が外国に行ける機会はあまりなかった。

パラオ熱帯生物研究所は日本学術振興会によって1934年にコロール島のアラバケツ部落に開設され、1943年に閉鎖されるまでの間、延べ27人の若い研究員が派遣されて、サンゴをはじめとする南洋のさんご礁生物の研究を行った。研究員は皆20代か30代の無給の副手か大学院の学生だったが、無名の若い学徒たちが純粋な研究に情熱を燃やしてパラオで行った研究の成果は、英文のパラオ熱帯生物研究所研究報告に66篇の論文、そして邦文雑誌「科学南洋」に116篇の論文となって刊行され、今日でも燦然たる成果を誇っている。当時の研究員には元田先生のほか、江口元起、阿刀田研二、川口四郎などの、さんご礁研究者ならだれでも知っている先生方に、羽根田弥太、阿部宗明、時岡 隆、三宅貞祥などの、後にわが国の海洋生物学をリードされた方々の名前がある。

元田研究室では朝から夜遅くまでフォルマリンで固定したカイアシ類やオキアミ類の標本を観察して、顕微鏡で個体数を数えるような作業をしていたので、研究が進むにつれて、私はプランクトンが水の中でどんな生活をしているのだろうか、どんな群れをつくっているのだろうかかと疑問を持つようになった。最初に英文を完読したA.C. ハーディ卿の「The Open Sea: The World of Plankton (Collins 1956)」は私のプランクトン研究の道を決定的にしてくれたが、生きている動物プランクトンを扱う機会はそう簡単に来なかった。米国留学を終えて開設したばかりの東大海洋研究所のプランクトン部門に籍を置いた頃、私はカリフォルニア大学デービス校のW. ハムナー博士と彼のスキューバダイビング

チームがバハマの海に潜って撮影した素晴らしいプランクトンの写真をナショナルジオグラフィック誌上で見た(National Geographic, 146(4), October 1974)。すっかり魅せられて、私は思った。「スキューバダイビングをしたらもっとプランクトンのことが分かるかもしれない」。

1978年に私は当時、国から派遣されて勤務していたユネスコ本部自然科学局の使節として、独立して間もないパラオを初めて訪れた。そしてそこで、今では有名なクラゲの池でタコクラゲの行動を研究していたハムナー博士夫妻にさんご礁を案内してもらった。後に共同研究を始めたハムナー博士に出会ったのも、あこがれのさんご礁を見たのもその時が初めてである。日本に帰ってから、私は早速スキューバダイビングの講習を受けた。その時のインストラクターが保坂三郎氏である。保坂氏との幸せな出会いは奇遇としか言いようがない。

海が大好きな保坂氏と彼のダイビングショップ「シーライオン」の同好会に私に加わって、あちこちの海で潜り、サンゴを眺めているうちに、やがてさんご礁の科学と海のダイビングを結びつける小さな研究所を作りたいという夢が芽生えた。パラオ熱帯生物研究所の精神を継ぎ、意欲のある若い人たちが美しい阿嘉島のさんご礁を研究の場にして活動する。私たちはそんな研究所を思い浮かべた。そして1988年7月、保坂氏の強い意欲と私財の提供によって、阿嘉島臨海研究所が開設された。当時、日本では唯一のサンゴ研究の場であった琉大には東大海洋研究所の頃からの友人であった山口正士教授がさんご礁学講座を担当していたので、私は研究の第一歩で彼からいろいろ教えてもらった。「基礎研究を進める余裕のない熱帯の途上国に代わって、自国にさんご礁を持つ数少ない先進国として、日本の果たすべき役割はもっと大きい筈である」。臨海研究所は開設時のそんな意気込みを現在までずっと持ち続けている。林原 毅さんや下池和幸さん

が研究員になって臨海研究所の研究活動が軌道に乗ってから、私たちは阿嘉島にパラオ熱帯生物研究所で活躍された元田先生をはじめ、川口先生、阿部(宗)先生、三宅先生らをお招きして、賑やかに昔のさんご礁研究の話をしていただいた。そして、後に賛同者を募り、2001年1月、日本のさんご礁研究の原点であるパラオ熱帯生物研究所跡地に記念碑を設置した。

阿嘉島臨海研究所が開立された頃、沖縄ではサンゴの一斉産卵はほとんど知られていなかった。サンゴを漁には邪魔な尖った石ぐらいに思っていた島のウミンチュから「石が卵を産みますか？」と訊ねられたことがある。それで私たちは、隣接する阿嘉小中学校で、児童たちにさんご礁の大切さを話す特別授業を始めた。研究活動の初期には慶良間の海のサンゴの産卵活動を観察するためにオーストラリア海洋研究所からA. ヘイワード博士やP. ハリソン博士を招いて指導を受けた。また、遺伝や進化については国立遺伝学研究所(当時)の杉山 勉教授と服田昌之博士が、そして幼生の着生や変態についてはカリフォルニア大学サンタバーバラ校のD. モース教授夫妻が、毎年阿嘉島での研究に加わって刺激を与えて下さった。また日本財団などからは研究助成金が提供され、多くの企業の協力を得て技術開発の成果をあげることができた。阿嘉島臨海研究所の名前が広く知られるようになって、毎年、国の内外から数多くの研究者が訪れ、さんご礁とそこに棲む生きものや海の化学と物理学、そして時には陸上の生きものについても様々のテーマで研究が行なわれている。

今日の私の受賞は阿嘉島に滞在してサンゴとさんご礁の研究を進めた多くの方々の協力の賜物である。ここに主な方々のお名前を挙げて謝意を表したい。

保坂三郎、山口正士、杉山 勉、服田昌之、綿貫啓、A. ヘイワード、A. モースの諸氏、臨海研究所の歴代の研究員の林原 毅、下池和幸、木村 匡、岩尾研二、谷口洋基、藤田和彦、田村 實の諸氏、研究船の金城英盛氏とシェフの上林利寛氏、大学院生時代に研究に加わった王 文樵、深見裕伸、大久保奈弥、波利井佐紀の各氏。そのほか多くの方々に感謝します。

時々ひとからなぜ海の研究の道に入ったのかと尋ねられる。私はただ陽光と戸外の生活が好きだったので、海でも山でもどちらでもよかったのだが、院生の時、北洋を横断して米国西海岸を訪れた調査航海で、広大な海に大きな魅力を感じた。そして今でも、水に潜った瞬間から海を選んでよかったと思う。さんご礁にはいつでも新しい発見がある。サンゴの触手や周りの魚の動き、水のきらめき、自然は絶えず微妙に変化して美しい。

私は自然科学の基礎は自然への畏敬と自然を愛する気持だと思う。海のいのちを対象にしている研究者は、自然や生きものの変化をもっと自分の目で、自分の感覚で確かめることの大切さに気がついて欲しい。今回東北地方を襲った大津波に対してもっとも有効だった退避手段は高所に逃げよと言う先人の教えであった。それに比べコンクリートの壁を築いて災害を防ぐな

どというのは思い上がりも甚だしかった。自然に向き合った経験がなく、いつも手引書だけを見てコンピュータに向き合っていた人たちが作った津波予想が誤っていたのは当然だった。自然に対する畏れの感覚を、私たちはもう一度取り戻したいものだ。

古来、日本人は海にも森にも神が宿ると信じ、自然から与えられた恵みに感謝し、自然と調和して生きてきた。その気持こそ、地球と生きものを護るキーワードになると、私は思う。しかし人間は市場経済のもとに利益と便利さを追求することのみ走って、自然を破壊し続けている。サンゴやさんご礁が無くなったら、サンゴの研究もない。さんご礁を護り、真のサンゴの森づくりを目指して、私は阿嘉島臨海研究所で、いつも海や生きものに触れながら、研究を進めてゆきたいと思っている。

